

コリヤークのトナカイ飼育
---1996年ペンジナ地区スラウトノイエの調査---

大島稔

(小樽商科大学言語センター)

1. スラウトノイエ Slaunoye 村の歴史

1) 定住化以前

移動生活をしていた頃は、一つのキャンプで所有するトナカイの数は今よりも多かった。(Varvara Konstantinovna Jotvagal、年齢約90歳。チェムカチェム chemqachem という丘の近くのトナカイ遊牧キャンプで生まれる。チュコトカのワイエゲック (Wajeyek) に住んでいたときに結婚)

父、ヌテンヴァット (Nøtenvat) には2人の妻がいた。ニコライの母と、その2人の兄と、3男の自分と1人の姉妹の一家族、父のもう一人の妻 (Tautañaw)、息子1名 (řavoqjewwə) と娘2名 (ñawl'u と veřəl'e) の一家族からなる。これに娘の夫たちや独身者の他人が加わっていた。1つのテントにみんなで住んでいた。父は、2つのトナカイの群をもち、各トナカイの群は5000頭ずつであった。もちろん私有であった。この私有トナカイは、サフホーズ (ロシア語 sovkhos 「国营農場」) ができたときに、各男子に50頭以下の私有を許して、残りは、サフホーズに供出させた。(Nikolay Nytenvatavich Everson、1936年 Palpal 山近くのパルウェイェム (Palwejem パルパル川) という所で生まれた。)

自分の父は、チュクトカ出身で、チュクチ語とロシア語を話した。母は、マルコ (マルコは川の名前で、ロシア名はマルコーバ Markova という) 出身でコリヤーク語を話した。4人の男の兄弟がいて自分は3番目で、弟が1人、妹が1人いる。

自分は、子供の時にはチュクチ語を話していた。アヤンカ (Ayanka) に住んでいた時、アヤンカの人々の半分は、チュクチ語を話していた。しかし後にコリヤークの人々と移動生活を送るようになって、コリヤーク語を使うようになった。チュクチ語も少し覚えているが、コリヤーク語の方が流暢だ。(Wasiliy Petrovich Mogonin、1932年生まれ)

チュコトカのワイエギ (ロシア語 Vayegi) という所で生まれた。ワイエギはチュクチとコリヤークの混住する村である。彼女の祖母は、パラナ (Palana) とチギリ (Tigiri) の間にあるヴァヤンポルカ (Vayanporka) の出身である。祖父は、北のチュクチ族の出身。祖父母ともトナカイ遊牧民であった。彼女の母は、スラウトノイエで生まれた。彼女の父はチュクチであったが、彼女が生後3ヶ月のスターリンの時代に連行されたので、母親一人に育てられた。(L'ubov Urevna Savuna、1939年チュコトカのワイエギ生まれ)

2) 交易祭り

この辺にロシア人が来たり、スラウトノイエができる以前の話しであるが、チュクチやコリヤークが集まり、丘を目印とした場所で交易を行っていた。たとえば、チュコトカのガウケジョムカン (ḡawqejomqan 「女性服の森」という意味の丘) で一年に一度、毎年12月の一番昼の短い日(冬至)に開催された。この交易には、後になってロシア人、カムチャダールが参加するようになった。

テント(yulta)を一行に並べた構造の大きなテントの家が臨時に建てられ、そこで寝たり、炊事をしたりした。テント内には、焚き火が5ヶ所もあった。テントで作った食事を外に持ってきて、大きな家の近くの雪の上に置いて、それを食べながら交易する。これは盗みがないようにするためである。

コリヤークとチュクチは、交易にクズリ獣(wolverine)、カワウソ(river otter)、キツネ、オオヤマネコ(lynx)の毛皮(この順で高い)、肉を持って行く。仲介者のカムチャダールが持ってきた砂糖の塊や板茶(pressed tea)と交換する。この砂糖の塊やお茶は、(姿は見せないが)アメリカ人の交易者がもたらしたものであった。

カムチャダールは、コザックとイテリメンとの混血であるらしい。彼らは犬ゾリに乗って交易に来た。カムチャダールはロシア語を使うがアクセントがロシア人のと違っていた。

数日のあいだ交易が続いた後、各キャンプの代表からなるトナカイ橇の競争が行なわれた。その後、服をぬいで雪の上でレスリングが行なわれた。勝者には、トナカイ、毛皮の服、アゴヒゲアザラシのベルトなどが賞品として贈られた。キャンプを代表する男性が出場しない場合には、代りに女性が出場することもあった。特別の服を着て、左肩だけを出して闘った。(Varvara Konstantinovna Jotvagal)

後にアメリカ人がたくさんの犬ゾリに乗ってキャンプからキャンプを訪れ、ライフルなどをチュクチの肉や毛皮と交換して行った。山(ペンジンスキー山脈)を挟んで反対側の海に住むチュクチがアザラシ皮などを脚の低いトナカイ橇に乗せて交易にやってきた。海のチュクチはアゴヒゲアザラシの皮を交易品として持ってきた。Tango と呼ぶ地のチュクチが北方の海の近くに住んでいた。Paren'のコリヤークとも、Palansky のコリヤークとも交易した。(Nikolay Nytenvatavich Everson)

3) 定住化の頃

1928年ころ、スラウトノイエの地に政府の建物が建てられた。これがスラウトノイエの町の始まりで、当時は、木造の政府事務所(ロシア語でkontora)と小さな店と倉庫だけであった。人々は、それまでは移動生活をしていた。(Marfa L'el'evna Tavritvagal. 1908年チュコトカのハティルカ(Khatyrka 生まれ))

スラウトノイエは、ロシア語の地名であり、コリヤーク名は、ジャージョルカーギガン(Jajolkayinən. ジャージョルウェイェーム Jajolwejem 'fox river' とペンジナ川が交差している所。)といった。Jajolwejem は、川の水の色がキツネ色だからついた名だ。(Marfa L'el'evna Tavritvagal)

遊牧生活をしていて、時々、政府の事務所のあったスラウトノイエにやってきた。そこにコリヤークの人が住むようになったのは、サフホーズ (Sovkhoz 国営農場) が始まった 1935 年頃だ。(Nikolay Nytenvatavich Everson)

1936 年頃にスラウトノイエにやってきた。政府の役所の木造建築と人の住むテント (yulta) があった。(Varvara Konstatinovna Jotvagal)

スラウトノイエの最初の集落は、現在の町から 3 キロほど北にあった。色々な地方からトナカイの群が来て、多数のテントが建っていたという。(L'ubov Urevna Savuna 生まれ)

私有トナカイを集めて、サフホーズができ、ロシア人が長で、その名をグレシーノフと行ったと思う。先住民がトナカイを飼育し、ロシア人がトナカイの頭数を数える仕事をする。(Marfa L'el'evna Tavritvagal)

当時の冬のキャンプでは、4 名の男と 3 名の女 (妻) でトナカイの世話をし、家族の他の者は村に残っていた。Varvara と夫、夫の父方の平行イトコにあたる 3 人の兄弟と (その内の一人がチーフ)、その妻たちの構成である。夏キャンプでは、10 名の男がトナカイ飼育に携わった。(Varvara Konstantinovna Jotvagal)

犬は、トナカイ飼育では牧羊犬のように働く。犬ゾリは使わなかった。トナカイ櫓を使った。(Varvara Konstantinovna Jotvagal)

2. 現在のトナカイ飼育

1) 村の概況

スラウトノイエ (Slautnoye) は、ペンジナ (Penzhina) 河下流域の内陸の村である。1994 年 1 月 1 日現在コリヤーク自治管区による人口統計調査によると、人口 670 名、そのうち先住民人口は、362 名 (先住民比率 54%) である。先住民は、トナカイ遊牧を主たる生業とするコリヤークである。スラウトノイエの人口の約半分は、白系ロシア人であり、彼らは、建築、土木、運送 (雪上車、船舶、空港)、行政、学校、幼稚園、通信などホワイトカラー的な仕事に従事している。一方、コリヤークの人たちは、もっぱらトナカイ遊牧を仕事としている。

村の家は、二階建てアパートも少しあるが、平屋の二戸建てが多い。平屋の敷地内の温室でキュウリ、トマトなどの野菜を作り、地下室に酢漬けで貯蔵する。戸外の菜園では、ジャガイモなどを作る。たとえば、Nina Tenanto さんのところに招かれていただいた昼食は、野菜スープ、パン、トナカイ肉とマシュトポテト、ブルーベリーと紅茶であった。

2) 交通手段

昔は、川で甲板のない木製の舟 (コリヤーク語 *fattovfat*) を使った。6 人も乗れる舟など色々な大きさがある。(Nikolay Al'aykovich Koyalkhot)

夏の 7 月と 8 月は、ペンジナ河に沿って下流のマニリ (Manily)、カメンスコイエ

(Kamenskoye) を経由し、スラウトノイエを通り、最上流のアヤンカまで荷物を運送する定期便がある。ペンジナ河の支流オクラン (Oklan) 河でも船が走っている。マニリからスラウトノイエまでは、18 時間の行程である。

スラウトノイエ出身でパラナ (Palana) 在住の商人 Andrey Kavavtagin 氏は、ペンジンスキー地区でチャーターしたヘリコプターで食糧品をコリヤークの伝統的村々に運ぶ仕事をしている。Andrey さんがスラウトノイエに空輸した物資は、いずれも麻袋に入った米、砂糖、小麦粉、マカロニであった。

3) トナカイ飼育以外の生業

植物

この辺の樹木は、ヤナギ(willow)、白樺(birch)、ナナカマド(stone birch)、スギ(cedar) で特にスギは薪として燃料に利用する。(Nina Tenanto)

動物

この辺では、魚は、keta (シロザケ)、gorbusha (カラフトマス)、gol'ets (極北イワナ) が多い。rainbowtrout (ニジマス) がいる。ペンジナ河には、chiru、omul' (何れも魚名不詳) がいる。

chiru と omul' は内臓だけを除いて魚卵も含めて丸ごと保存用に塩蔵にしたものを冬に食している。白系ロシア人の学校の先生、ソホーズ長が我々に持ってきてくれた。

korshka (キウリウオ) は、ペンジナ河では、Kamenskoye までしか遡上しないので、スラウトノイエにはいないとのこと。

動物では、moose (ヘラジカ)、bear (ヒグマ)、snow sheep (ユキヒツジ)、hare (野ウサギ) がいる。トナカイの群の近くには polar wolf (シベリアオオカミ) が来るという。

鳥では、goose (ガン) が多い。

漁撈

漁撈には、漁網 (コリヤーク語 ギーゲンギン yijənyij、チュクチ語 クープレン kəpren) を用いる。アイヌのマレックに似た回転魚鉤銚は、アッチアイ (ʔattifaj) と言う。海で一年間だけ試したことがある。(Wasiliy Petrovich Mognin)

刺し網は、高さ 2 m で長さ 30 m である。8 月にシロザケを網でとる。網で 1 度に 50 尾程度とれる。(Nikolay Al'akovich Koyalkhot. 1936 年スラウトノイエ生まれ)

夏には釣り竿で魚を釣る。釣り竿での魚釣りは、男のみである。(Mariya Umkav'evna Kayoko. 1931 年スラウトノイエ近くの生まれ)

我々の訪れた木造常設小屋のあるキャンプで、トナカイの捕獲をしている間に 2 名の白系ロシア人がスノーモービルで釣りから帰ってきた。聞くと kharius (カワヒメマス) を釣りに行っていたという。魚釣りは交替で行う。今月は彼らの当番だそうだ。

罾

野生の野ウサギを捕るための罾 (mil'ut enat) は、木や棒に結びつける。ウサギの足の高さである 25 センチほどの高さに設置する。獣道にひも罾を 10 個ぐらいかける。1 日 2～4 匹がかかる。野ウサギの毛皮は、現在、帽子の素材として売っている。サフホーズの専門家が捕獲する。政府の役人が買い取りに来る。(Nikolay Al'akovich Koyalkhot)

4) トナカイ飼育の概況

スラウトノイエのトナカイ遊牧サフホーズ(sovkhov)には、本来、8 つのトナカイ遊牧チーム(ブリガーダ brigada)がある。No.1 は、100km、No.2 は 168km、No.3 は 199km、No.4 は 70km、No.5 は 130km、No.6 は 200km、No.7 は 170km そして No.8 は 176km、村から離れている。(Varvara Konstantinovna Jotvagal)

現在のサフホーズ長は、Uladimir Nikolayvich Mizinin で、先代の父親もサフホーズ長であった。村人は、現在のサフホーズ長はスラウトノイエ生まれで、遊牧に直接携わるコリヤークの人たちと子ども時代から一緒に育ったので信望も厚く経営手腕が評価されている。

トナカイ遊牧チームには、サフホーズ長によって任命された牧童頭がいる。その牧童頭をまとめるチーフが Nina Tenanto さんの夫 Aleksandr Tenanto である。(Nina Tenanto)

現在、遊牧を行っているサフホーズの遊牧チームは、5 つであり、各チームの構成は、男性の牧夫 6 名と女性 2、3 名からなる。全体で 45 人くらいがトナカイ遊牧に従事している。たぶんスラウトノイエのサフホーズ全体で 2 万頭以上のトナカイがいる。(Nikolay Al'akovich Koyalkhot)

各遊牧チームは、2000～3000 頭のトナカイを管理している。現在は、昔からみると頭数が少し減ってきている。夏のキャンプ地には、5 つのテント(yulta)があり、冬のキャンプ地には、2 つのテントがある。冬にはスラウトノイエよりも内陸に移動し、トナカイを遊牧し、夏には、東方の海岸部へ移動する。夏の浜に樹木はない。また、夏には、3 人ずつ、交替で休暇を取る。(Mariya Umkav'evna Kayoko)

現在、町の中には、退職者のための老人ホームがある。(Mariya Tinagirgina)

5) 遊牧キャンプの構成

遊牧キャンプは、一家族で構成されているとは限らない。マリアさんのキャンプは、彼女の 2 人の息子と一方の息子の息子(孫)と複数の他人からなっている。(Mariya Umkav'evna Kajoko)

ニコライさんは、No.6 牧畜キャンプの長である。キャンプの成員は、家族や親族の者であるとは限らない。(Nikolay Al'akovich Koyalkhot)

(1) Koyalkhot, Nikolay (自身)

- (2) Tinene, Nataliya (1の妻)
- (3) Tinagirigin, Grigory (1の母方叔父)
- (4) Tinagirigin, Anatoly (3の息子=1の従兄弟)
- (5) Kulu, Fyodor (1の甥)
- (6) Kelewe, Vika (5の妻)
- (7) Yetek, Anatoly (1のまた従兄弟)
- (8) Koyarkov, Yuri (非親族)
- (9) Ulin, Aleksandr (非親族)
- (10) Tinetegin, Vasiliy (非親族)

6) 牧畜キャンプの仕事

トナカイ・キャンプでは、朝、山に登って歌を歌う。別に、特別な山とは限らない。今でも年寄りも冬でも山に登って歌を歌うが、若い人はやらなくなった。夏も朝、山に上ってトナカイの群を見守りながら歌を歌う。(Mariya Umkav'evna Kayoko)

春には、トナカイの子どもが生まれる。春と秋は、トナカイ遊牧以外に活動する時間がない。(Mariya Umkav'evna Kayoko)

夏の仕事は、皮をなめしたり、テントの家の枠組みとなる木々を集める。夏に狩猟をする特別な時間はないが、クマや鳥などに偶然あえばそれを獲る。イチゴ摘みも夏の仕事だ。(Mariya Umkav'evna Kayoko)

遊牧キャンプでの女性の仕事は、縫い物、調理と食料の管理(特に腐っていないかを調べる)、川からの水汲みは、女性だけの仕事だ。(Mariya Umkav'evna Kayoko)

女性が一人でキャンプの全体の面倒を見なければならないことがある。(Marfa L'el'evna Tavritvagal)

男性がたきぎを集めて来て、切って薪にする。薪をテントに運び入れるのは女性の仕事である。(Marfa L'el'evna Tavritvagal)

15歳の時からツンドラで働きだした。3年間子育てをしている間は村に住んでいたが、その後再びツンドラに戻って働いた。(Mariya L'el'evna Tinagirigina)

7) 牧童小屋

コリヤーク自治管区議員の選挙の前日にある遊牧チームが村から一番近い牧童小屋まで戻ってきてトナカイ屠殺をするというので調査に出かけた。村からヴィズィデホート(雪上車)で片道2時間30分の距離の地点にある。

No.1とNo.6の2つの混成チームだという。屠殺のための常設木造小屋がある。全員で14名がおり、うちコリヤークは12名であった。女性は、2名いた。1人は老婆で、もう1人は結婚したばかりのVika Keleweである。後に魚釣りに行っていた2人とその他

に女性を一人含めて4、5人が到着した。

この混成チームは、2500頭のトナカイを管理しているらしい。うち1500頭のトナカイを連れてきた。残りの1000頭はどこへ行ったのかわからないのでヘリコプターで探さなくてはならない、という。

Nikolay Al'akovich Koyalkhot が No.6 の牧童頭 (brigadir) である。1500頭のトナカイは、これは中心的なトナカイ群ではなく、殺すためのものであった。トナカイの主要群は、ツンドラの上にいる。

8) 個人所有のトナカイ

牧童小屋で屠殺されたトナカイは、翌日のコリヤーク自治管区議会の選挙のために、牧童チームが村の近くのキャンプへ連れてきた群である。彼らは、個人所有のトナカイを18頭殺し、翌日、その肉や血を村に持ち帰るといふ。

後に No.6 の牧童頭に確認したところ、男性1名につき、トナカイを50頭まで所有することが許されているが、トナカイの所有頭数には個人差があり、8頭所有の男性もいれば、15頭所有の男性もいる。(Nikolay Al'akovich Koyalkhot)

彼らは、トナカイを見ただけで、誰の所有するトナカイであるかを識別できる。いつでもトナカイといっしょにおり、見慣れているからである。体形、模様、行動の特徴、枝角などで識別する。(Nikolay Al'akovich Koyalkhot)

個人所有のトナカイには、耳の一部を切り取って目印をつけ、他人の所有するトナカイと区別している。各人が各人の印をもち、トナカイの耳の一部を切り取って印を付けている。たとえば、右耳下1ヶ所、左右の下に2ヶ所などと区別する。(Nikolay Al'akovich Koyalkhot)

9) トナカイの生態的知識と管理

何頭かのトナカイには名前が付けられている。「まだら」、「顔白」、「脚白」などの色に関する名前が多い。(Nikolay Al'akovich Koyalkhot)

オスの方がメスよりも枝角が大きい。春になるとトナカイはあばれることが多くなるので、枝角をつかむことは危険である。(Nikolay Al'akovich Koyalkhot)

冬に殺すトナカイは、オスと年をとったメスのトナカイが主である。(Nikolay Al'akovich Koyalkhot)

10) トナカイの捕獲

特定のトナカイをつかまえる時、トナカイの群の中に入って行ったアザラシ皮製の投げ縄でつかまえる。最初の投げ縄は、枝角をめがけて投げる。脚を狙って2番目の投げ縄を投げることもある。

投げ縄のコンテストがある。両腕を広げた長さ(尋)の12~14倍ぐらいの距離を投

げることができる。(Nikolay Al'akovich Koyalkhot)

一人が投げ縄を投げ、枝角に投げ縄がかかると、2～3人で投げ縄を引っ張り、曳き綱を短くしながらトナカイに近づいていく。最後は一人が角を押さえ、もう一人がすばやくトナカイの左前脇腹から心臓に目がけてナイフを一刺しする。血が流れている時もトナカイは暴れているが、やがて血がどっと吹き出して絶命する。

11) 解体

トナカイを牧童小屋に近い解体場所まで運ぶと、四つ脚のひづめの裏から上に向かって皮にナイフを入れ、腹まで裂く。未だ血は出ない。皮を薄い箔のような脂身から外していく。ナイフと手で皮を剥いでいく。つぎに腹から胸へそして首へと刃物を入れる。

3人がかりで解体が始まる。一人(男)は、頭部の処理。一人(男)は足の関節。一人(女)は内臓。頭部は下顎を外してから首全体を外し、その毛皮もはぎ取る。脚関節ももちろん皮を剥いで、関節を切り離していく。肉と骨になったものは、どンドン雪の上に並べていく。内臓の処理が一番大変だ。これは女性の仕事らしい。横隔膜はそれほど厚くない。上部の胃袋(コリヤーク語 *nanqən*)を取り出す。3つに分かれている。胃袋の中から未消化のトナカイゴケ(*ʃajleki*)を絞り出す。後で、血を入れるのに使う。その後、小腸を一度に引き出す。心臓、腎臓、肝臓などの内臓各部を引き出す。

最後に、腹腔にたまった血をカップで汲み出し、先ほどの胃袋に入れる。血が少なくなると、一滴も無駄にしないように、トナカイの長いあごひげに血を染み込ませて、それを絞って胃袋に入れ、戸外に放り出したままにして凍らす。

12) 処理と調理

胃袋の内容物を取り出してから、血をその胃袋のなかに入れて戸外に放置しておく、胃袋の中で血(*kiwəl*)が凝固する。それを切り取ってスープを作る。このスープには、ジウムグジウム *jəmyəjəm* と呼ばれる野生植物の根とトナカイの脂身とジャガイモ、タマネギを入れる。このスープは、体温を高める効果がある。(Nikolay Al'akovich Koyalkhot)

ニーナさん(Nina Tenanto)は、小屋の外の裏手で焚き火にトナカイの腎臓2組(4個)を入れて料理していた。

焚き火では、三脚の上に斜めに棒を乗せ、その棒の先に刻み目を入れ、そこに鍋ややかんを吊す。最初に見たとき、腎臓を鍋かけの台になる三脚の組み木の上に置いていたので何かの儀礼かと思って尋ねるが、炭火の上に置いて料理するのだという。

小屋の中では、Vikaさんが牧童全員の料理を一人で受け持っている。揚げパンを作りながら、私たちが客だということで、トナカイの舌のブイヨン(スープ)をご馳走になる。サブホーズ長のUladimirさんは、トナカイ料理の最高の味だと言っていた。Uladimirさんの持ってきた *chiru* の塩漬けと豚の脂の塩漬けを食べる。骨付きトナカイ肉とカラシ

の小皿が出た。肉にはカラシをつけて食べる。

3. 衣服

空港や町中では、コリヤークの人たちもロシア化した服装をしているが、トナカイ飼育の戸外での仕事の時は、伝統的なトナカイ皮製衣服を着る。

1) 毛皮の処理

トナカイの毛皮を乾かすのは男女の仕事である。トナカイの毛皮は、中に棒を3本通して乾燥させる。仔トナカイの毛皮は脂肪がすくない。乾燥させた後で皮をなめすが、皮なめしは女性の仕事である。皮なめしには、なめし具（石または鉄の部分 *enanəvenəŋ*、木の部分 *awət*）となめし板（*wiwi*）を使う。（*Wasiliy Petrovich Mogonin*）

2) 衣服の製作

トナカイの子供（カージュージュ *qajuju*）の毛皮2枚で、両面が毛皮となる、2枚重ねで内側に毛が向き、外側にも毛が向く帽子が1つできる。これは売るための帽子用であり、伝統的なものではない。伝統的な帽子（*peŋken*）を作るためには、毛皮1枚でよい。帽子を作るのは、女性の仕事である。（*Wasiliy Petrovich Mogonin*）

仔トナカイの毛皮は、コートにも利用する。皮を外に毛皮を内にして作る。軽くて暖かいコートができる。服の材料としては、大人のトナカイがよい。現代の服は、外は繊維で、裏地に毛皮を用いる。（*Wasiliy Petrovich Mogonin*）

毛皮製の下着は労働着で、*maniw icʕən* (*maniw* は素材、材料、繊維という意味)という。（*Wasiliy Petrovich Mogonin*）

ブーツ（*plakət*）用には仔トナカイの毛皮は薄すぎるので、成獣トナカイの足の毛皮を利用する。ブーツの底は、ワモンアザラシ（*qotaŋən 'lakhtak'*）の毛皮を使う。何人かの人が、ペンジンスキー地区のマニリ *Manily* やパレン *Paren'* から（靴用に使う）アザラシの毛皮（*meməl* アゴヒゲアザラシ）を持ってくる。

二重構造のブーツは、主に生後6ヵ月のトナカイの毛皮が内側のブーツ（*pamjat*）となる。内側靴は毛が内向き、皮が外向きで、常に二重靴を履く。靴紐はトナカイ皮で作る。靴の上下2ヶ所で、1ヶ所は膝近く、1ヶ所はくるぶしの所で紐でしばる。（*Wasiliy Petrovich Mogonin*）

スボンも二重で外ズボン（*qonajte*）は、トナカイの皮製である。内ズボン（*γəcyoc qonajte* 「下のパンツ」）は、下着のようなものである。（*Wasiliy Petrovich Mogonin*）

リューバさんは、民族衣裳となっているフード付きの晴れ着（男性用も女性用もともに *icʕən* という）を着てやってきた。自分の衣裳の頭飾りは、コリヤークとチュクチの折衷だという。衣裳は昔の普段着で、デザインは、女性ごとに異なる。仕事着は、フードなしの短い服である。トナカイ皮を染めて仕立てるのは昔も今も同じだ。（*L'ubov Urevna*）

Savuna)

衣服の模様について、晴れ着（クフリヤンカ kejkkej）の背中になどに満月の模様をつける。飾り用垂れ房（pin' aqaw）は、ウサギの足の裏を使う。3本1組のビーズの垂れ房を kəp'l'il'aw（複数形）という。（Viktor Nutankavavich Akoko。1930年、ヤボルカ ウエイエーム Jajolkaweyem 生まれ）

4. 住居

テントの設営や移動は、男女の仕事だ。（Marfa L'el'evna Tavritvagal）

テントの枠組みを組み立てるのは、男性の老人の仕事だ。テントをトナカイ皮で覆うのは女性の仕事だ。（Marfa L'el'evna Tavritvagal）

1つのテントの住居内部には5～6つの寝室がある。入り口から奥に向かって左側に食糧置き場、右側に薪と食糧置き場、中央に炉がある。全体の家の大きさは、私たちの使っていた部屋（12畳くらい）の4倍くらいの大きさだ。テントの入り口は太陽の昇る東に向いている。（Marfa L'el'evna Tavritvagal）

5. 人の一生と儀礼

1) 結婚

19歳か20歳のころに結婚したが、遅い方だった。普通は子供を生むことができる年齢に達すれば、月経が始まればすぐに結婚したものだ。（Marfa L'el'evna Tavritvagal）

4人の夫をもった。最初の夫とは、仕事を一緒に行なうために、13歳か14歳で結婚し、男子1人と女子1人をもうけた。最初の夫と死別した後で結婚した相手はすべて最初の夫の親類だ。（Imcha Reneko）

夫となった男性のオジが来て、彼女をオイの妻としたいと申し出た。両親が娘の結婚相手を決める。父親が最後に決め、その理由を娘に告げる。女の子が、小さい時に将来の夫となる人の所に連れて行かれ、そこで育てられてから結婚することがあった。女性の両親は、嫁入り先が悪ければ、娘を取返すことができた。

結婚式には、親戚が集まってトナカイの供儀をし、トナカイ櫓のレースが行われた。花嫁にトナカイや衣服の贈り物をする。結婚式で歌う特別な歌はない。踊りをしながら歌う。みんな誰の歌かわかる。新郎新婦も歌う。（Imcha Reneko）

2) 命名儀礼

人間が生まれるのは、死んだ先祖の靈魂が入るからだ。

子どもが生まれると、両親が、子どもにこのようになって欲しいという希望をこめて名前を選ぶ。彼女の場合は、病気を取り除き、人々を助けることができる女性になるようにということで、「病気の上に座る」という名前（Tavritvagal）が付けられた。生まれた翌日に、命名された。（Marfa L'el'evna Tavritvagal）

生まれてきた自分の娘の一人は、皮膚病をわずらっていた。これを見た家族の者は、この娘は、火傷をおって死んだ親戚の女性の生まれ変わりであると考え、その人の名前をつけた。その時につぎのようなことを行なった。太陽が昇る時に、「来ているのはお前か？」と聞き、その名前をつけた。すると娘の皮膚病が治った。親戚の女性は、あの世から来ていた。(Marfa L'evna Tavritvagal)

子供の名前が適切でない場合には、子供が病気になると考えられている。その時には、老女が適切な別の名前を見つけ出す。(Marfa L'el'evna Tavritvagal)

3) 太鼓の製作と儀礼

太鼓(ジャジャイ jajaj)の皮は、ユキヒツジか生後6ヵ月の仔トナカイの皮がよい。ユキヒツジの皮は音が澄んでいて、高い音が出る。太鼓の枠木は、ヤナギで作る。ヤナギは軽くて音がよい。枠の内側に付けられているジャラジャラは、鉄とか錫製だ。パチは、クジラの髭(baleen)をトナカイの毛皮で包んで作る。(L'ubov Urevna Savuna)

7月になると木につぼみがついて樹皮がはぎ取りやすくなるので、新しい太鼓を作ることができる。まず、木を選ぶ。木の枝に投げ縄を掛けて選ぶ。投げ縄は、一回で枝に引っかからないといけない。引っかからない時には別な木を選ぶ。一回で引っかかった木が太鼓にふさわしい良い木である。その木の根元にトナカイの内臓の脂肪の一片を置く。それから斧で木を伐る。(Viktor Nutankavalovich Akoko)

結婚や子供の誕生などのイベントの時に、新しい太鼓を作る。今、キャンプに太鼓を置いてある。2つのドラムを持っていた。ひとつは夫の両親から、もうひとつは結婚した時に作った。結婚した時に新郎にも作ってくれる。

太鼓の枠木となる白樺は、通常、家族の中の年取った男性がさがす。曲がった木で、薄い枠を作る。かなりの幅が必要だ。太鼓の皮は、プロの縫い師(男女の長老)が準備する。普通は、老女である。(Marfa L'el'evna Tavritvagal)

テントの入り口から見て最奥にあるジョジョング jojoŋa と呼ばれる長老たちの寝室に太鼓をトナカイの皮でできた袋に入れて保管する。(Marfa L'el'evna Tavritvagal)

太鼓の皮が破けた時には、老女のみが皮の部分を取り替えることができる。自分の太鼓は三度目の張替えである。(Viktor Nutankavalovich Akoko)

父と母は、複数のドラムを持っていた。そのうちのひとつをもらった。しかし、それを彼女はなくしてしまったので、男性の老人に頼んで最近作ってもらった。(L'ubov Urevna Savuna)

母の太鼓は、母から娘へと受け継がれた。父の太鼓は父から息子へと伝えられる。太鼓は、先祖の魂を表現するものだ。私が生まれたときに、家が火事になったが、その時も太鼓だけは燃えなかった。(L'ubov Urevna Savuna)

自分の太鼓は、彼の祖父の太鼓である。家族の中でも欲しい人が相続する。息子でも娘でもいい。子供がいない時には、他の親戚の人にあげる。彼は、この村に住むニーナ(女

性)に彼の太鼓をあげる予定である。(Viktor Nutankavalovich Akoko)

父が生きていた頃には、太鼓をもっていた。手で持つ柄のついた(取り外しできた)チユクチ型の太鼓をもっていた。その太鼓は、木のクギを使っていた。皮の部分がこわれて、杵木もこわれたので、木のバチも壊れたので、柄のないコリャク型の太鼓に変えた。カメンスコイエに置いてきた。(Wasiliy Petrovich Mogonin)

4) 入れ墨

少女の時に、長老によって入れ墨が施された。石の上の窪みに炭を置きつぶして、水を混ぜ、針に炭の水(木炭の水)をつけて顔に刺す。死んでからあの世でトナカイ飼育者の自分たちと他者を認識、識別するための目印だ。どの部分に入れ墨を付けたいかを言えば、顔や手に施してくれる。男も入れ墨をするが、男は、目と目の間に一つ入れ墨をつけるだけだ。村々で女の人の入れ墨はそれぞれ違った特徴がある。(Marfa L'el'evna Tavritvagal)

Ninaさんの世代は入れ墨をしていない人が多い。顔全体にはしないが、Ninaさんも手の甲の一つしている。

4) 葬礼

葬式のための特別の場所がある。人が死ぬと、トナカイ橇を引かすために2頭のトナカイを供犠にふす。一周忌の命日に同じことを行なう。(Marfa L'el'evna Tavritvagal)

人が死ぬと、犬を供犠にする。犬はその所有者と一緒にあの世に行く。人間の死体は焼かれるが、犬の死体は焼かない。犬の所有者(死者)のあの世に必要な生活用品もいっしょに焼かれる。2頭のトナカイもいっしょに焼かれる。(Varvara Konstantinovna Jotvagal)

葬儀の日に橇をひくために殺した2頭のトナカイの肉は死者の親戚でない人が取っていく。死者は、トナカイ橇の上に紐で縛り付けられて焼かれる。

葬式の日には歌を歌うことは、タブーである。死者の服以外の服を直したり、縫うことも禁止されている。

参加者は笑ったり、冗談をいって、死を恐れていないことを示す。もし死者の親戚の者が泣くとしたら、午前中か朝のみ許される。2日目から泣いてはいけない。

小さな子供が死んだ時、一頭のトナカイを殺す。天国に行く時に、子供が背中に乗って行くためのトナカイだ。子どもは道草するといけないので、トナカイ橇ではなくトナカイの背に乗せる。若い男性や女性が死んだ場合、歩いて天国へ行く。遺言で、歩いて天国へ行くと言った場合にも、トナカイ橇が必要ないのでトナカイを殺さない。

村にトナカイがいない場合には、キャンプのトナカイを殺し、それに乗って死者は天国へ行けるようにする。死んだ人を送る場所とトナカイを送る場所が違って良い。

人が死んで1年経つと、3頭のトナカイを死者を記念するために殺す。別の所で3頭の

トナカイ（どのトナカイでも可。訓練された橇曳きトナカイではない）を殺し、その肉を食べる。肉は残らずに食べ、肉のついていない骨のみを残す。その骨を使って、トナカイの再構成をする。橇といっしょに、その再構成されたトナカイを焼く。一回忌の日は、死者に敬意を示すために、太鼓は叩かない。ゲームを行なう。(Varvara Konstantinovna Jotvagal)

6. トナカイ飼育に関わる儀礼

1) 火の神

火の管理は女性の仕事なので、毎朝、女性が囲炉裏で火を起し、トナカイの脂肪のひとかたまりを火に投げ込む。人々が食事をする前に火に食べ物を与える。

火は、生き物だ。だから生き物のように扱う。生き物なので、人は火は水をかけて消すべきではない。自然に消えるのが望ましい。

火は、象徴的に女性である。火は人間よりも古くからこの世にいる。だから、火を尊敬している。

朝、太陽が昇る時に、トナカイの四肢骨のひづめを切り取り、髓を取り除いたものを火にくべる。髓は食べる。四肢骨を勝手に捨てるとうナカイが病気になる。トナカイが足を折らないように四肢骨を火にくべるのだ。太陽が沈んだ後では、骨を火にくべてはいけない。毛皮が使われなくなったら、捨てずに火の中にくべて焼く。火の中にゴミなどをくべてはいけない。(Marfa L'el'evna Tavritvagal)

火の神に捧げるものは、食べ物、脂身と野ウサギの毛である。(Nikolay Al'aykovich Koyalkhot)

火は、人間に危険が迫っていると警告してくれる。荷物用のそりを使いキャンプを移動する前に女性は火の音を聞く。ある女性は、火の音が異常だったので、動かない方がよいと判断したのに、男が移動を決めてしまった。そして、次の日に移動したが、案の定、その男は、トナカイの群の半分を失ってしまった。(Marfa L'el'evna Tavritvagal)

2) 火起こし板による儀礼

キャンプではテントの中に小さな人形(figure)が置いてある。それが火起こし板(yicyij)で、顔にあたる部分に両目と口があり、胴体にあたる部分に3つの穴があいている。祭りの時に、トナカイの骨の髓(脂身)を食べ物として火起こし板の口の中に入れる。秋の祭りの時には、この火起こし板で新しく火を起す。火起こし板の穴に乾燥ゴケを入れて火起こし棒(milliyitəḡən)に弓(tigucəḡən)の弦を巻いて錐のように回して火を起す。

この人形の火起こし板は、通常、母からその娘へと伝えられる。複数の娘がいる場合には、長女がこの火起こし板を相続する。この火起こし板は、火を維持し、家族の者を暖める生き物である。娘がいない時には、息子へと伝えられる。伝える親戚がいない場合には、ツンドラの上に置いてくる。その時には、ウサギの毛と脂をまぜた食べ物を供物

(innelvet) としていっしょに置く。。

この火起こし板は、今でも女性が持っており、信仰している。年に2回の祭りの時、トナカイを解体する時にツンドラへ持って行く。秋になると夏の放牧地で新しい火を起こす。春の仔トナカイの子供(qajuju)が生まれる時の祭り(kilvaj)の時にもこの火起こし板で新しい火を起こす。

普段だれもこの火起こし板を見てはならない。年2回の祭り時以外は、他の人に見せてはいけない。見ても良いのは、それを管理する女性のみだ。祭りの時に新しい火を起こすときにのみ、他人もその姿を見ることができる。(Imcha Reneko)

秋祭りの時に、妊娠しているメスのトナカイを殺し、これを火起こし板に食物として与える。そしてこのメスのトナカイの死体を春まで保存しておく。良い仔トナカイに恵まれるように、美しいトナカイに恵まれるように祈る。

人や犬や火や火起こし板は、それぞれ別の世界を持っており、そこに住んでいる。

あの世には聖なる人々が住んでおり、火起こし板を持つ必要はない。そこでは、老人たちが大きなトナカイの群をもって生活をしている。

火起こし板にはつぎのような神話がある。クイクニャーク (kujkøn' aqu) が、上の世界で (upper world) に火起こし板とトナカイを創った。トナカイとともに火起こし木がこの世に降りてきた。それから人間がこの世にクイクニャークと一緒に降りてきた。地上に人間、昆虫や動物を創った。クイクニャークがどんな姿をしているかは知らないが、人間の間であったと思う。(Imcha Reneko)

クイクニャークの妻はミーティ(miti)、息子はジーンギーアーンガコット jįįgiaŋaqot、娘はエメムコット ememqot である。(Nikolay Al'akovich Koyalkhot)

3) 占いと予知

右側のトナカイがあくびをすると、オオカミか何かが近づいてきているという言い伝えがあるので人々がトナカイの群の近くに残り見張る。(Marfa L'el'evna Tavritvagal)

トナカイの左側の肩胛骨を燃えさかる薪で下から焼く。骨の表面に茶色の輪ができる。それを冷やすと小さなひび割れができる。ひび割れは川のように見える。それによって夏の牧草地に行くには幾つの山を越え、どの川を越えるのかを予見できる。(Marfa L'el'evna Tavritvagal)

4) 聖なる場所

夏の放牧地を訪れる時、尊敬する場所に行き、2頭のトナカイを犠牲にする。(Marfa L'el'evna Tavritvagal)

聖なる山がいくつかある。トナカイを見るための山として使う。別に供物をあげたりしない。たとえば、スラウトノイエの西方にあるパルパル Palpal がそうだ。(Mariya Umkav'evna Kayoko)

昔から伝えられた聖なる石 (enelvatwəqwəŋ) がある。移動の途中で聖なる石を見つけるとトナカイの左目、舌の一片、耳の一片、心臓の一片、尾の一片、左側の前足からとった髓を石の上に置く。石が無い時には、トナカイの枝角の間の頭頂部にこれらの食べものを置く。(Nikolay Al'akovich Koyalkhot)

トナカイ・キャンプからスラウトノイエへ戻る途中で暗くなり始めた頃、東側に山があり、三日月がかかっていた場所で、ヴィズィデホト(雪上車)を止めた。そこからトーチカ(ヤチ坊主)が少なくなり、少し平坦になる。ここは死者を焼いた場所ので、我々がその地に初めて来たから、トナカイの毛と内臓の脂とをまぜて、一人一掴みずつ雪の中に埋めるようにと言われた。トナカイ肉とパンにワインを飲む。先祖に innelvet「供物」としてワインをやるために地面に一滴垂らせという。Ninaさんは、火を燃やして、トナカイの毛と脂身を混ぜて火の中に入れた。ウサギの毛でもいいという。

5) 犬の供犠

今でも人が長期の病気になり、薬草など何でも試してみても治らなければ犬を供犠にする。コリヤークは、犬は人間よりも力があると考えているので、犬に病気を持ってもらうことで治癒すると考えている。この供犠は、病人の病気が治る最後のチャンスである。白と黒の犬が最も価値が高い。犬をまず尻から喉へと刃物を入れ、皮を開いて、背骨を切り離す。犠牲にする犬の頭は、太陽の昇る方向(東)に向け、犬の腸を取り出し、その輪の中を右回り(時計回り)に病人がくぐる。犬の死体は、家の東側に頭を東側に向けたまま放置しておく。普通の犬は、殺してその皮を使うが、犠牲になった犬は、聖なるものなので、その肉も皮も使わない。(Nina Tenanto)

6) シャーマン

ケチヘン(qecifen)という名の女性シャーマンがいて、彼女の兄弟の病気を催眠術で治した。祖母(L'ubov Urevna Savunaの母の母)は、名前を qaw(木のコブ)という霊力のある女性(aŋaŋalʂo)であった。呪文を組合わせて、人々を治療した。木の枝をとり、木の枝に向かって呪文を言って、地面に埋めることによって7月に雪を降らしたりした。(L'ubov Urevna Savuna)

人が病気になり、あらゆる手をつきしても治癒しない時にはシャーマンに頼む。シャーマン、病人とその妻(ないし夫、配偶者)が特別な部屋に入り、部屋を明るくして治療する。治療や儀礼の時のシャーマンの服装は、頭の頂上が穴の開いた帽子を被り、衣服にたくさん小さなベルやメタルを飾り付け、編んだ赤いふさ(pin'aqaw)が下がっている。

シャーマンには男性もいれば女性もいる。

シャーマンには、お礼として数頭のトナカイを贈るが、贈るトナカイはメスが良くとされる。(Marfa L'el'evna Tavritvagal)

7. トナカイに関する祭り

祭りには、「トナカイが夏のキャンプ地の海岸から戻る祭り」である秋祭りや冬祭り、キルバイ(kilvaj)と呼ばれる春祭りがある。(Nikolay Nytenvatavich Everson)

1) 春のキルバイ祭り

春のキルバイ祭りは、毎年、決められた特定の日に行なうのではなく、トナカイの毛が抜け落ちる時、最初の子が生まれる頃み行う。ほぼ4月頃がその時期にあたる。楽しいお祝いであった。別の村から客を招くこともある。客人は、メスのトナカイ(1頭のみ)を食し、ベニテングダケ(flygaeric)を食べて、楽しい歌や楽しい踊りばかりを踊る。歌は父の歌や、母の歌、祖母の歌を歌う。トナカイレースやレスリングはない。この祭りは、家族ごとに行なわれ、一日だけで終わる。ただし、その準備には一年間を要する。その日には、妊娠したトナカイを殺す。その祭りをとりしきる人はトナカイの群をツンドラで監視している人々のところへ肉などを持って行ってあげる。一日ごとに、異なる家族がひとつずつお祝いをする。従って、この祭りは一週間も続くことがある。(Imcha Reneko)

新たにトナカイの子供が生まれる時に、歌や踊りをする。祝いの準備は、前もって行なわれる。老女でも、指や耳がけがをするくらいボールゲームを行なう。キャンプ単位でお祝いを行ない、他のキャンプの人々を招く。(Varvara Konstantiinovna Jotvagal)

現在、サフホーズでは行なっていない。1970年代までは1日の期間(昼夜通して)のお祭りが行なわれていた。近くにいる遊牧チームが集まって行なう。主に男性による、徒歩、走行やトナカイ橇の競技が行なわれた。歌ったり、踊ったりする。個人の歌を歌った。ただし、現在でも3月か4月にトナカイレースは行なっている。(Nikolay Al'akovich Koyalkhot)

2) 秋の祭り

トナカイが夏のキャンプ地から戻って来る10月頃に行う。歌ったり踊ったりする。(Wasiliy Petrovich Mogonin)

秋祭りは現在でも行っている。テント内は火を起し、火に食物を与えてから祭りを始める。テントの戸口を閉じて、トナカイをまねたダンスを行なう。テントの入口や煙突をすべて閉じ、火以外の光を中に入れないようにする。一人ずつ太鼓をたたきながら火の周りを右回りに(時計回りに)踊る。

大きな家の中には、2本が下向き、そのうち1本が中向き(これがテントの円柱体の部分)、1本が上向き(これが上部の円錐を作る)になっている計3本組の柱が12か13組並んでいる。真っ暗闇の中で、内側に張り出した柱に躓かないように踊るのがコツ。踊り手が柱に触れて倒れたら、爆笑の渦となる。主に男が踊り手である。時には、トナカイがテント内をのぞこうとする時がある。トナカイがテント内に入らないように戸外で杭につなぐ。(Nikolay Nytenvatavich Everson)

3) 冬の祭り

冬の祭りは、グヌーン レウト *yənun lewt* と言い、「頭の真ん中」の意味で「真冬」のことを指す。(Wasiliy Petrovich Mogonin)

冬の祭りは、12月の終わり、満月の夜に行なわれる月を祝う祭りである。この辺では反対に8月にはまったく月が昇らない。

月を祝うのは、月光によって暗い冬でもトナカイを見ることができ、遊牧ができるので、人々は月が遊牧を助けていると思って感謝する祭りである。この時期には、まだ太陽が出ているうちにすべての日常の仕事を終えて、夜に持ち込まないようにする。

この祭りでは、白いトナカイは珍しく貴重なので月に捧げるために、最初に白いトナカイを殺し、月に向かって祈りの言葉を言う。焚き火をして血のスープを作る。焚き火の周りに、太陽が東から西へ動くように時計回りに左から右へ太陽の運行を血のスープで描く。

肝臓などの内臓をすべて取り出した後、この白いトナカイを2つに分け、毛皮でくるんで、春まで保存する。

別のトナカイを大地のためのいけにえにする。もうひとつトナカイを暗黒のために西側に向けて捧げる。この場合には、白いトナカイである必要はない。さらに大きくて脂ののったトナカイを屠殺する。この祭りでは、踊ったり、歌ったりしない。

祭りの翌日には別のキャンプ地に移動する。古いキャンプ地には、胃の(コケの混じった)内容物を地面におき、その上に枝角を置き、左右の角の間にトナカイの肝臓を置いて残して移動する。(Nikolay Nytenvatavich Everson)

8. 謝辞

以上に名前が上がったスラウトノイエの村の人々以外に共同研究者の一人で航空券の手配、トナカイ・ソホーズの方々の紹介し、ロシア語から英語への通訳もお願いした Aleksander Nikolayevich Badayev 氏、情報提供者の紹介に御尽力いただいた Kamensoye の文化庁民族芸能担当官の Aleksander Nikolayevich Babenkov 氏、ヘリコプターに便乗させていただき、スラウトノイエ在住の親類を紹介していただいた Palana 在住の Andrey Kavatagin 氏、また、ロシア語から英語への通訳をお願いした Konstatin Vorisovich Namakonov 氏に感謝したい。

本報告の作成にあたり。著者自身のフィールドノートの他に研究分担者の岸上伸啓氏と甲地利恵氏のノートも利用させていただいたことを感謝する。